

桜と紙魚^{しみ}

nif

満開に近い桜の下に似合う物リストの中に、枝からぶら下がった先が輪になったロープ、というのはいないだろう。似合おうが似合おまいが吊るしてしまった物は仕方が無い。あとは自分を吊るすだけだが、迂闊な事に踏み台を持ってきていなかった。月明かりの中、手頃な箱なり石なりあればいいのだがと辺りを見回すが、そんなふうなくある訳も無い。どうして最期にこんな場所を選んだのだろう。

僕はいつも一人だった。僕の周りには、外から中へ入るだけの一方通行の膜があり、僕は必死にその外へ出ようともがいたがどうにもならなかった。

まるで世界の中で、自分だけが別の世界から間違っつてこれられたように感じる時があった。そんな事を考えていた時、他には一本の桜も無いというのに、春になれば山裾にぽつんと咲くこの桜を、僕は自分のアパートから見つけた。それ以来、ふと気づくと、この桜を自分の部屋から見ている。そして、僕がこの世界を去る事を考えたとき、この桜の事が頭に浮かんだのだ。

しばらく立ち止まっていたが、少し頭を振って、再び踏み台代わりにする物を探す。桜の幹の裏を見てみると、なぜだが地

面にスコップが刺さっていた。

これは踏み台にはならないな、なんでこんなところにこんな物が、と同時に思う。とりあえず手に取ろうとすると、その向こうに黒い人影が見えた。

「やあ、スコップが必要かい？ あいにくそれはこれから僕が使うから、こっちの小さいのにしてくれないかな？」

まるで教室で筆箱を忘れた出来の悪い生徒に話しかけるように、その人影が喋った。右手には小さな移植ごてを持っているようだ。

「ロープの下に穴を掘って、その穴のふちから穴に落ちれば吊るされるって言うのは、悪くない考えだと思っけど、ちよつと手間がかかりすぎるよね。もう少し準備に時間をかけた方が君と僕との相互利益につながると思うよ。具体的には三日間待つてくれるとありがたいんだけど」

僕の類型化された貧弱な反応パターンの中には、自殺直前にその方法について話しかけられたときのものはなかった。規定値^{デフォルト}の反応は沈黙だ。

「ああ、この状況では不審に思うのも仕方が無いね。自己紹介、と言っても僕には紹介するほどの肩書きも無いし、この状況で

それが君の不信感を払拭する事もあり得ないだろうけど、とりあえず全くの無駄ではないってことには同意してくれるだろうか？ 僕の名前は崎本仁志、歳は十七歳、世間的には高校生ってことになっていくけど、ほとんど高校に行つた事はない。病気でね、いわゆる不治の病つてやつだ。だからといって誤解しないでくれたまえ。僕は自分の寿命が長くないからと言って、他人が自分自身で寿命を縮める行為を否定するつもりは無いから。どんな人間にも、死ぬ権利ぐらゐは与えるべきだと思つてゐるからね。君に三日間、ここでその権利の行使に及ぶ事を延期してほしいというのは、純粹に僕と君の利益のため。要するに取引だね。」

そう言つて一歩前に出てくると、影になつていた顔が満ちかけた月の光に照らされる。

暗いとはいへ、明らかに青白すぎる細い顔、肉付きが悪く長くみえる手足、それらをわざわざ強調するかのような、細身のブラックジーンズと黒のトレーナー。不治の病かどうかはともかく、病人であるという事は確かな事に思えた。こちらの自己紹介をすべきかと思つたが、すぐにそんな事に意味は無いとすぐ気づいた。なにせこれから死ぬのだ。何かに意味があるなら教えてほしい。

「君の自己紹介は聴けないようだね。いやいいよ。よしとしよう。確かにこれから死にゆく者に名前を尋ねるなんて愚の骨頂だね。失礼したよ。そう言う意味では僕の自己紹介だつて滑稽だね。気づかなかつたよ。『後悔先に立たず』だね。とりあえず君の事は『君』とだけ呼ぶ事にするよ。もつと適当な二人称があるなら言つてくれたまえ、僕の方には特にこだわりはないか

ら。：：沈黙はこの場合肯定だね」

そう言うとき崎本はもう一歩僕の方に近づく。よりいっそう陰影が濃くなつたこけた頬が目を引き。

「では取引と行こうか。まずこちらの取引材料として次の二つを挙げるよ。最初にこの場所に来ていたと言う、既得権。もう一つはこちらが君に対して名前やその他一切の情報を要求しないし、ここであつた事も他ではいっさい言及しないという沈黙の約束だ。自殺しようとして失敗するつてのは、あまり宣伝したい事ではないだろう？ この約束でその事は無かつた事になる訳だ。要求としては、君がここで死ぬのは三日待つてほしいという事と、実はもう一つある」

そこで崎本は言葉をきつた。

「三日後、僕の死体をここに埋めてほしい」

おだやかな風が吹き、満開に近い桜の枝から花びらが数枚離れ、少し飛んで地面に落ちる。

「ここからだとき君の顔はよく見えないんだが、多分驚いてるんだろうね。そうだね、君には理由を知る権利がある。取引はすべての条件を相互に認識し合うのが前提だし、僕が君に依頼している事は、『死体遺棄』つていう立派な犯罪でもある。こんな事は今から死ぬつもりで君にしか頼めないよ。何せ死人は捕まゐる心配は無いんだから」

そう言うとき彼はスコップに手を伸ばし、自分の方に引き寄せた。

「君にとつて世界は美しいかい？ 僕にとつては悲しいほど美しいね。銀と赤の海に沈む夕日、霧雨の中の蒼い銀杏、そして

白い月の下の桜。ほとんど外に出る事のかなわなかった僕が、それらを見たとき、どんなに美しいと、悲しいと思つたか分かつてもらえるかな？」

僕は静かに崎本の顔を見つめた。

「僕は美しい世界の中の、ちっぽけな病室の中で生きてきた。人につれられて何度か外に出る事もあったが、自分で世界との接点を保てる事と言えば、本を読む事ぐらいだ。それぐらいしかなかった。もうどこまで自分なのか、本なのか区別がつかないくらい、僕と本は一体となつているのさ。僕はね、時々自分が紙魚しうみになつたような気がするのだよ。世界という図書館の、病院という書庫の、病室と言う書棚の本に巣食う小さな虫だ」そして彼は、僕たちのいる山から、少し離れたところにある病院を指差し、あそこの三階だよ、ここはあそこからよく見える、と言つた。

「そんな紙魚にもね、世界を飛び出す機会がちゃんとやつてくるんだ。それは死だ。どんな物をも超越する、そして僕に唯一許された行く先の無い通過儀礼さ」

立つているのもつらいのか、彼はさらにスコップに体重をかける。しかし声の力はさらに増したように思えた。

「その、最初にして最後の通過儀礼には、当然、最高にして至高の、古人の羨うらやむような舞台設定が必要なのだよ。そしてそれが今、目の前にある！」

崎本は少し呼吸を整えるかのように、少し目を閉じた。

「君は西行を知っているかい？ 知っているようだね。では当然この歌も知っているだろう？」

願わくば 花の下にて春死なむ その如月の 望月の頃

とても病人とは思えない、凜りんとした声で詠うたつた。

「意味も知っているだろう？ 春、満月の下、桜が満開の中で死にたいという事さ。でもね、これはすごく難しい事なんだよ。桜が満開なのは長くて三日ぐらい、そして満月はおよそ三十日に一回だ。単純に考えても重なるのは十年に一度、しかもそのときに寿命が尽きなければならぬ。そして今だ。後三日で満月、桜は八分咲き、気象庁はこの三日間の晴天と、三日後の満開がまず間違いないと言っている。そのうえ僕の命は尽きかけている。こんな偶然が、偶然であつてたまるものか。世界が僕の最期のために最高の舞台を用意してくれたと考えると、何が悪い。そして僕の体を桜に喰わせて僕自身はこの図書館から外に出て行くのさ」

そして右手を差し出した。

「さて、この取引を受けてここに穴を掘つて僕を埋めてくれるなら、この手を握つてくれたまえ。僕のために最高の舞台を用意してくれないか」

僕はまるで自分が手を差し出せば、鏡の中の自分が手を差し出さねばならぬように、彼の手を握っていた。

「ありがとう」

崎本は言つた。

その後は穴を掘ると言う単純労働だ。最初のうちは崎本がシャベルを、僕が移植うゑごてを使つていたが、やがて見かねて僕がシャベルを使う事にした。崎本は少し残念そうだった。穴を掘る間も崎本は喋り続けた。病院からの脱出法やここまでの近道、この、山裾やますその一本だけ取り残されたようにある桜が、いかに自分の病室からよく見えるかという事。僕はそれを聴きながら、黙々

と穴を掘った。取引のせいかな、単に興味が無かったのか、崎本は僕の事については何もきかなかつた。自分を表現する事ほど苦手な事が無い僕には、それが何よりありがたかつた。

やがて穴は膝よりは浅いぐらゐの深さにまでなつた。崎本は時計を見て少し慌てた。

「もうそろそろ夜の見回りの時間だ。帰つてベッドにいないと面倒な事になる。今日はここまでにしよう。なに、後二日ある。それに最終日は病院にいない事が見つかつても構わないんだから、今日よりもずっと時間が取れる。これで十分さ」

そして僕たちはシャベルと移植ごとと首吊り用ロープを穴に入れて、落ち葉で隠し、明日同じ時間にここに来る事を約束して別れた。

次の日、僕は学校を休んだ。親には体調が悪いと伝えた。共働きの両親は、さほど追求する事も無く仕事に向かい、僕は部屋にこもつた。そしてなぜ死ななかつたのかという事と、なぜ崎本の取引を受けたのかという事を考えたが、結局理由は分からなかつた。ただ、この二つの質問の答えは同じ物かもしれないと思つた。

約束の時間、崎本はそこにいた。

穴を掘りながら、崎本はまた喋り始めた。

「もう一つ、君に言つておくべき事がある。それは『なぜここに死体を埋めるか』という事だ。昨日は『なぜここで死ぬか』しか説明していない事に後で気づいたよ。『取引にはすべての条件を認識し合う事が必要』と言つておきながら、とんだ失態を演じてしまつた。もう遅すぎるかも知れないけど、説明させ

てほしい。それで、もし君の考えが変わつたなら、明日は来なくてもいい」

僕は無言でシャベルを突き立てる。

「『桜の木の下には屍体が埋まっている』つていう言葉は聴いた事があるだろう。梶井基次郎の『桜の樹の下には』にある有名な言葉だ。僕は梶井基次郎のファンでね。昨日、僕自身が本の一部のように感じると言つただろう？ 彼の短編集は、まさに僕の一部に他ならないよ。僕の中にはあの本のすべてがあり、あの本の中には僕がいる」

崎本は桜の根を注意深くよけながら土を掻き出す。

「でもどうして梶井基次郎はそういう風に桜をとらえたんだらうね。それだけじゃない。桜ほど日本人の心に強く死を意識させる植物も無いんだ。西行や梶井基次郎はもちろん、神代には木の花の佐久夜毘売が皇族の寿命を縮め、江戸時代には浅野内匠頭が桜の下で散る事によつて、後世まで伝わる名場面をつくつた」

「でも僕は思うんだよ。桜の持つ魅力とは、散る事による死出への憧憬どうけいだけではない。西欧の蝶やエジプトのスカラベのように、枯れた枝から咲く桜は、復活と変化への切望ではないか？ ね。花をつけ、散らせ、葉を上げらせ、それを落とす。イモ虫やカブト虫に比べて、なんと美しく、洗練された象徴だろう。その一点だけを持つてしても僕は日本人として生まれた事を誇りに思えるよ」

崎本は少し手を休め、肩で息をし、桜を仰ぎ見た。僕も同じように上を見る。

「これほどまでに今の僕が必要とする象徴が、他にあるかい？ 僕の通過儀礼を最高の物にするには、僕自身が桜と一体化する

必要があるのだよ」

復活と変化への切望。死んで力強く甦よみがえられるのなら。自分自身を思い通りに変かえられるのなら。生きていくのはこんなにはつらくないだろうに。

そのあと、手を休めたまま二人はただ風の音だけを聞いた。

次の日、同じ時間に桜の木の下に崎本はいなかった。しばらく待ったが、ただじりじりと満月が中天への道を上つていくだけだった。なぜだが僕はどうしても待つ事ができなくなり、崎本が指差した病院に向かって駆け出した。

病院の前まで行くと、閉まった玄関の前で一人の女の人が立っていた。僕の姿を見ると少し驚いたようだった。僕は彼女に崎本と言う入院患者を訪ねたいという事を伝えた。

「聞いてるわ。ついてきて」

彼女の後から、夜間通用口を通り三階の病室まで行くと、僕たちが部屋に入ると入れ違うように、看護婦と医者が小さく会釈をして出て行った。そこには点滴と酸素吸入器をつけた崎本がいた。そして、ほとんど聞こえないような、くぐもった小さな声で言った。

「やあ……きつと来てくれると思っていたよ。まだ取引は有効なんだね。残念ながら、僕は行けそうにないよ。せつかく君にあれほど手伝ってもらったのに」

崎本は少し手を上げた。僕はその手を両手で持った。

「最期に二つお願いがあるんだ。ごめんよ、君には手間ばかりかけさせて。一つは君の声を聞かせてくれないか。もう、君の顔がよく見えないんだ。だから君が確かにそこにいる事をもつ

と感じたいんだ」

僕は少し困ったように、きつき僕を連れてきてくれた女の人の方を向いた。

「……仁志ひとし、彼は口がきけないんだよ」

彼女の手にはきつき僕が渡したメモがまだ握られていた。

崎本は少し目を見開いた。

「……そうか。……でも……君とは幾夜互いに語り明かしてもわかりあえないはずの事を……分りあっている気がする」
しばらく吸入器の規則的な音だけが聞こえた。

「もう一つは」

崎本は自分の手の中にある、一冊の古びた文庫本を差し出した。それから視線を戻すと彼は少し笑っていた。それで十分だった。

僕は文庫本を手にとると、後も見ずに病室を飛び出した。

桜の木の下に着いたとき、満月は最高点までの道のりを後少ししか残していなかった。

僕は腰まである穴に入り、落ち葉を掻き出し、シャベルと移植ごととロープを取り出した。代わりに病室から持ってきた文庫本を穴の底に、静かに寝かせた。その上から土をかぶせる。かなりの量があったが、服が汚れるのも構わず死にもぐるいでシャベルをふるった。埋め終わる頃には、月は最高点に達していた。

風が吹き、一瞬視界が青白くなるほど桜が舞った。

再び走って病院に戻ると、またあの女性が待っていた。そのまま走って病室に行こうとした僕の肩をつかんで、彼女はやさしく、寂しそうに言った。

「もういいの。もうあの子のために走らなくてもいいの」
彼女を支えられるように歩いて、病室に着くと、崎本はまるで窓の外を見るように首を傾げ、静かに死んでいた。
その側に行くと、僕の体から、一枚の桜の花びらが舞い、彼の胸の上に落ちた。

僕はベッドに寄りかかるようにひざまずき、泣いた。

あれからちょうど一年経った。僕はまだ生きていた。

言葉では伝えられない事をわかり合えた友達を見舞うために、今年もこの桜の下に来た。

月は欠けかけで桜は今にも散ってしまいそうだった。

少し強い風が吹いた。

あのときのように桜が舞った。